

記憶というのはどのくらいの重さを持つのだろうか。ヒトの脳は一二〇〇gほどの重量だそうだけれど、きっと情報のありかはそのだけではない。記憶の残骸は春の雨のように細胞のすみずみを濡らし、すっかり重くなった躰をこの世界に留まらせる。その重みが時に骨や肉を砕きそうになっても。

朝、遠くから聞こえる教会の鐘の音で目を覚ます。それはなつかしい誰かの声みたいになつて呼びかける。まぶたの裏が明るい。ぽっかりと目を開け、天井の木目をしばらく見つめる。明るい木肌にお化けの涙みたいな染みが見える。冷たいシャツから手を出して、ほうぼうに散らばっている宝物に触れる。ねこのぬいぐるみのメープル、お気に入りの白いワンピースと木綿のソックス、硝子のペンと、日記。わたしは日記をたぐりよせ、革の表紙の手触りを確かめ、匂いを嗅ぐ。

ページを開くと、そこには青いインクでびっしりと書き込みがされている。紙は古びてくったりして、森の中の落ち葉みたいな甘い匂いがする。そこに描かれている数々の夢は、わたし自身が書いたものだというのに誰かちがうひとの物語みたいに見える。それから最後のページをめくると、こう書かれている。

— わたしの名前はネアン。

わたしは声に出してそれを読む。ネアン、ネアン。口の中でその響きを確かめる。それはこの世界の扉を開ける秘密の鍵みたいに見える。その名前だけが、わたしが自分自身について知っている唯一の情報だった。わたしはペンを手にとって昨晚見た夢を書き始める。

辺りは紫色の薄闇に包まれている。そこはどうかやたら古い教会らしい。堂内にはひんやりとしたかび臭い空気が漂っている。夕暮れのひかりがステンドグラスから射し込み、朽ちそうな木の床に奇妙な模様を描き出している。背の高い男性と、小柄な女性の姿が見える。男性はキャメルのコートに緋色のマフラーをし、手には黒い革の手袋をはめている。革靴はびかぴかに磨かれていて、顔が映りそうなくらいだ。女性の方は黒いベルベットのジャケットに揃いのスカート、ぴんと尖った黒いハイヒールを履いている。頭には大きな羽根飾りのついた帽子を被っている。帽子の翳からのぞ

く肌の色はミルクをたっぷり浴びたように白く、唇の横にほくろがあった。彼女の髀から百合の香りがかすかに漂っていた。

辺りはとても静かだった。空中を舞う埃が床の上に落ちる音さえ聞こえそうなほどに。

「いよいよだね」と男性が言った。

「そうね」女性が答えた。

「長い旅になるだろうな」

「きつとそうでしょうね。でも私、あなたと一緒に怖くないわ」

女性は男性の肩に頭をもたせかけた。ふたりはしばらくじっとしていた。まるで影絵の中に閉じ込められてしまったみたいだ。彼らの影が床に長く伸びていた。その影が床をぬめぬめと這い、ステンドグラスに達し、天井まで覆いつくすように思われた。しかし影は今のところ狡猾な狐のように彼らの足元で黙り込んでいる。わたしはわざと明るい声を出して言った。

「ねえ、メープルも一緒に行っていないでしょう？みんないっぺんにいなくなったら、きつと淋しがると思うの」

ふたりは顔を見合わせた。不穏な沈黙が漂った。男性は咳払いをし、静かな声で言った。

「残念だけど、君は一緒に行けないよ。メープルもお留守番だ」

「どうして？」

「そういう掟なんだ」

「オキテってなあに？」

男性はしばらく腕組みをして考えていたが、「ちよつと失敬」と言っただけでわたしの膝からバスケットを取り上げ、中から林檎を取り出した。

「ここに林檎がひとつある。僕が手を離したらどうなるだろうか」

男性は林檎から手を離れた。とん、と音がしてその赤い実は木の椅子に落下した。音は意外なほど大きく響き、四方の壁にこだました。祭壇で眠る神様を起こしてしまうんじゃないかと思うほどだった。音が止むと、男性がまた口を開いた。

「この世界の掟は、僕たちの力では変えられない。手を離せば林檎は落ち、地面に落ちた林檎は放っておけば腐ってしまう。そこに人間が入り込むことはできない。わかるかな？」

わたしは頷いた。

「つまり、そのオキテのせいでふたりは遠い場所に行かなくちゃいけないって、わたしはここに残る。そういうことね？」

返事はなかった。その代わりにいきなり肩を抱きしめられ、わたしは身動きが取れなくなった。わたしの頬に女性の頬がびったりと押しつけられていた。それは熱く、涙の匂いがした。しゃくりあげた声がとぎれとぎれに聞こえてきた。大人も泣くことがあるのだと、その時はじめて知った。わた

しはどうすればいいかわからなかった。彼女の涙がわたしの頬を伝い、首筋へ、鎖骨へと流れ、ワンピースの襟を濡らしていった。一世紀ぶんくらいの時間が流れたころ、女性はようやくやくわたしから身を離れた。まるで何かの刻印のように、彼女の涙とおしろいの入り混じった匂いが肩のあたりに残った。

「神様が君を守ってくださいますように」

ふと気が付くと男性がすぐそばにいて、首に何かをかけてくれた。鎖骨のあたりにひやりとした重みを感じた。手をやると、小さなビーズ玉のようなものに触れた。わたしはそれを窓辺の明かりに透かして見ようとした。けれどいつのまにかひかりは去り、夜の使者がそこら中に忍び寄ってきていた。

「ロザリオって言うんだ。この珠を一粒ずつ繰りながらお祈りするんだよ」

男性が言った。それは亡霊の声みたいにくぐもって聞こえてきた。ふたりのシルエットは闇に溶けてとうに見えなくなっていた。

「忘れないで。僕たちはずっと君を見守っている。いつかきつとどこかで逢える。その日まで待ってて」

「さようなら、ネアン」

ふたりはそう言い、わたしの頬にかわるがわるのキスをした。それから扉を開け、静かに外に向かった。壊れたバイオリンのような音を立てて扉が閉まった。扉のすきまからほんの一瞬だけ見えたひかりは、また闇に吸い込まれてしまった。

教会の鐘が鳴った。ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ。五つ目の鐘が鳴った時、わたしは目を覚ました。

書き終わったあと、わたしはしばらく自分の書いた文字を眺めていた。すると目の奥から水滴がこぼれ、ぱたりと落ちた。それは雨のように降ってきて、あつというまに紙面を濡らした。大変、インクがにじんでしまうと思うけれど、わたしは泣くのをやめることができなかった。それはちょうど誰かが探り当てた水源みたいに、牀の深いところから湧き出てきて止まる気配がなかった。何か大切なものを失ってしまったような予感が、針のように胸を刺した。涙のかたまりが次から次に喉元にこみあげ、堰を切つてあふれだしていった。牀がどうにかなってしまっいようなほど、わたしは泣いた。

泣き疲れてベッドに身を投げ出すと、首のあたりで何か冷たいものが揺れたような気がした。パジャマの下に手を滑らせると、小石の触れるようなかすかな音がした。たぐりよせると、手の中にロザリオがあった。紫陽花色のビーズがきらめき、ペンダントトップには十字架にかけられたイエ

スキリストの姿が施されている。窓辺からこぼれるひかりの粒を身にまとい、ロザリオはつつましく輝いていた。

—忘れないで。

彼らの声が耳元で聞こえたような気がした。もちろんそこには誰もいなかった。ただ風が通り抜けていっただけだった。風はかすかに甘くきらめいて、春の匂いを運んできた。